〔第 2 日目〕【ラウンドテーブル】10:00-11:30 《会場》AE653 教室

看護教育における協同学習の実践からの学び合い

企　画：鮫島 輝美（京都光華女子大学），緒方 巧（梅花女子大学）
司　会：鮫島 輝美（京都光華女子大学）
話題提供者：牧野 典子（中部大学）
話題提供者：緒方 巧（梅花女子大学）
ファシリテーター：緒方 巧（梅花女子大学）

キーワード：看護教育，協同学習，能動的学習法

近年、看護教育において，協同学習が注目されている。こうした背景には、教師や指導者が、一方的に教え込む講義や実習では，学習者の主体的な学習行動が引き出されにくい、といった現状がある（医学書院，2013）。また，現在，高等教育を受けている世代は「ゆとり世代」と呼ばれ，「学力低下」が指摘されるだけではなく，積極性がない，などと教員側からの評価が低い世代でもある。斎藤（2013）は，今の若者は，よくも悪くも「おとなしくて真面目」であるという。そして，当事者意識の足りない学生を，最初から「積極性があるかのように」扱ってもうまくいかず，授業の傍観者でなく，むしろ，当事者であることを指導し，学びの場に対する責任があることを自覚させる必要がある。教師–学生関係に代表されるような，上下関係による圧力よりも，友人関係といった水平関係による刺激が変化を促す。そして，リーダーになりたがらない学生は，リーダーを体験する機会を与え，「身体」を使って，リーダーシップ自体を学ばせるべきであり，知的好奇心のない学生を，「受験勉強では知的好奇心が育たなかった学生」という教師側の前提を見直し，強制的に読書をさせることで，情報へのアンテナそのものを育てる必要がある，としている。

このように見ていくと，「ゆとり世代」とレッテルを貼っている学生にこそ，協同の精神が有効であり，協同学習という教育方法が，学生を変化・成長を促す可能性を秘めていることが理解できる。また，教師側のネガティブな評価は，既存の教授方法ではなかなか学習効果が現れないという，教師たちの「対応の困難さ」への戸惑いとも見て取れるのではないだろうか。斎藤 (2013) が指摘しているように, 変えるべきは教師側の認識であり, 現状と打破するには, 学生を理解し，教育の原点である「学生の変化・成長を促す」ことを目指し（安永，2011），授業改善に努める必要がある。協同学習が，単なるグループ学習と異なる点は，①互恵的な協力関係，②個人の責任とグループの責任の明確化，③対面的で活発な相互交流，④グループ内の対人関係スキルの活用, ⑤成果の評価と継続的改善, の 5 点である (Johnson,D., Johnson, R., & Holubec, 1993/1998)。このような授業構造そのものが学生の変化・成長を促進する。

しかし，協同学習の良さを理解し，自らの授業に取り入れようとしても，「自分にやれるのか」「これまで以上の成果が期待できるか」「カリキュラムに時間的余裕がない」など，様々な

疑問や不安が起こり，二の足をふむ教師や指導者も多い（医学書院，2013）。なぜならば，手法としての協同学習こそ，マニュアルなどに代表される「形式知」ではなく，反省的実践（Schön, 1983/2001）に代表されるような「実践知」だからである。

「形式知」とは，状況や個人の違いに左右されない，一般化，抽象化された構造的な言語的知である。そのため，現場の実践の曖昧さやばらつきを削ぎ落として標準化し，複雑な行動を単純な要素に分解し，知識間の境界を明瞭にする。これまで形式知は，誰でもどこでも使え，教えやすく学びやすい合理的な知識とされ，これを新人に教え込むことが熟練者育成の効率化につながる，とされてきた。しかし，香川（2011）が指摘するように，形式知の伝達だけでは実践力は発達しない。実践力に必要な知こそが「実践知」であり，言葉では捉えがたい曖昧さや即興性，常に変化の過程にあるような動的な知，知識が形式化される時に削ぎ落とされる具体的なものなのである。そして，実践家の「発達モデル」は，具体的状況に縛られた状態から脱状態的な状態へ、つまり「具体から抽象へ」次第に上昇していく過程である形式知のものとは異なり，「抽象的な形式知を特定の状況に根付かせて具体化させていく過程」「抽象から具体への拡張」を伴うのが実践知の発達なのである。

このラウンドテーブルでは，看護技術教育において協同学習の理論・技法を用いて授業展開している実践報告を受け，実際に取り組む際に直面する問題や解決方法やそのヒントを情報共有し，協同学習のよりよい活用を目指す。早くから協同学習を導入し，様々な授業を展開している緒方氏（緒方，2013）と，成人急性期看護学野分野において協同学習に取り組んでいる牧野氏（牧野，2011）を迎え，「授業運営のコツ」について実際に触れ，協同学習の方法を体験する中で，普段感じている協同学習への疑問や思いを共有する場としたい。多くの参加者を期待している。

医学書院　2013　特集　教育の質を高める学習方法　いまから始める協同学習　看護教育　54(8)　647 頁

香川秀太　2011　実践知と形式知，単一状況と複数状況，分析と介入，そして質と量との越境的対話-状況論・活動理論における看護研究に着目して　質的心理学フォーラム　Vol.3　62-72 頁

Johnson,D.W., Johnson,R.T., & Holubec,E.J. 1993 Circles of Learning: Cooperation in the classroom Interaction Book Company

（杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤（訳）　1998　学習の輪-アメリカの協同学習入門-　二瓶社）

牧野典子　2011　看護大学の授業における協同学習の効果に関する研究　教育方法のパラダイム転換としての協同学習　協同と教育　7 号　47-56 頁.

緒方巧　2013　看護教育に協同学習法を取り入れる①　看護教育　54(4)　320-326 頁

斎藤孝　2013　若者の取扱説明書　「ゆとり世代」は実は伸びる　PHP 新書

Schön, A. Donald（1983）. *The Reflective Practitioner*, Basic Books, Inc.

（ショーン，A. D. 佐藤学・秋田喜代美(訳)　2001　専門家の知　反省的実践家は行為しながら考える　ゆみる出版）

安永悟　2011　協同学習のすすめ①　活動性の高い授業の実現に向けて　看護教育　51(4)　316–321 頁